変奏曲

校舎の屋上から眺め渡すと街があった
私の街だった―――

低く垂れこめた雲からは雨の予感が
私の黒い学生服をしみとおり
湿った風が呼んでいた
「お前には放浪を与えよう」と、呼んでいた

その街はまだ空を仰いでいた
私のスケッチの中にも雲は存在した
人生は創造ではなく、探求だった
次々と降り積もってゆく驚きの山だった

目を閉じても何も変わらず
見えるものは空と街であった
想像など入る余地があったろうか
押し寄せてくる抒情の波の中で

私に一瞬でも不安を感じることなどできたろうか
この波の消えうせることがあろうなどと
世界は既に窮み尽くされてしまっているかもしれぬなどと
その果てには虚無の荒野が存在し
創造を食いつぶそうと待ち構えているのだなどと

ふと耳をすますと歌声が流れていた
私は踵を返すと階段を下りて行った
風の呼び声のままに
放浪へと
誰が私を止めることなどできたろう
たとえ限りある未来を突きつけられたとしても

(1991.10.4)